

ドキュメントと同時に警鐘碑

— ハンス・プフィツナーをめぐる論争 —



ベルリン・ドイツ交響楽団の
プフィツナー演奏会パンフレット
(2007年10月3-4日)
© Deutsches Symphonie-Orchester Berlin

プフィツナー作品への興味を深めていただくため全5回にわたって掲載してきた特集の最終回のテーマは、ハンス・プフィツナーをめぐる論争です。(読響事務局)

〈ドイツ精神について〉をプログラムに載せたある演奏会が、ドイツ国内で話題を呼んだのは2007年秋のことであった。ベルリン・ドイツ響の首席指揮者に就任したインゴ・メッツマッハーが、シーズンを貫くテーマを「音楽におけるドイツ的なもの」と定め、その開幕演奏会にこの曲を取り上げたのである。その日はたまたまドイツ統一記念日である10月3日であった。

これに対し、ドイツに住むユダヤ人の利益代表であるユダヤ人中央評議会のディーター・グロールマン副議長(当時)は、ただちに声明を発してメッツマッハーを厳しく非難した。統一記念日のベルリンにおける〈ドイツ精神について〉演奏の試みは、ナチスのシンパだったプフィツナーの復権を目論むものであり、「救いようのない反ユダヤ主義者を、挑発を通じて社交界に出入りできるようにしようとする、厚かましくも危険千万な試み」であり、「極右とナショナリズムの陰謀を強化するもの」である、と。

この批判をきっかけにドイツの世論では短いが激しい議論が巻き起こった。グロールマンは、極右勢力が州議会に進出しネオナチが勢力を盛り返しつつあった当時のドイツにおいて、統一記念日に首都ベルリンでこのような曲を演奏することは、「致命的な政治的シグナル」を意味するとまで主張した。

プフィツナーはナチだったのか？

グロールマンの批判はプフィツナーに対する一般的な評価をほぼ要約したものと見てよいだろう。十二音音楽を拒否した保守反動の作曲家、反ユダヤ主義者でナチ政権とも親しかった極右の文化人……。

しかし、プフィツナーは決してナチの御用作曲家ではなかった。ナチ党员だったこともない。ナチ政権下で尊敬され数々の名誉を与えられたのは事実であるが、政府との関係は微妙なもので、自分の気に入らない相手には誰にでも噛みつき論争を挑まずにはいられないこの厄介な老人を、ナチ高官たちの多くはむしろ毛嫌いし遠ざけていたのである。

むしろプフィツナーは、「保守革命の作曲家」と呼ぶにふさわしい。保守革命とは、1920から30年代のドイツの知識人のあいだに流行した思想で、第一次世界大戦の敗北により危機に陥ったドイツ人の精神を、その伝統や文化の価値を護持することで再生しようとする考えである。保守革命は、右翼ナショナリズムを基調とし、反民主主義や反ユダヤ主義などナチスにつながる要素も多分に含んでいるが、それ以上に幅の広い知的潮流であった。その代表的な思想家であるメラ・ファン・デン・ブルックのグループとは、作家トーマス・マンも一時期近い距離にあった。同じころマンはプフィツナーとも親交を結んでおり、その論評『非政治的人間の考察』ではプフィツナーのオペラ〈パレストリーナ〉に圧倒的な賛辞を献げているほどである。〈ドイツ精神について〉には、プフィツナーが考えたドイツ文化の、「ドイツ精神」の理想像がたっぴりと歌い込まれているのである。

ドイツ社会のアイデンティティ危機

〈ドイツ精神について〉の論争がドイツの朝野を揺るがした前後の2000年代は、統一ドイツ社会のアイデンティティをめぐる、やはり一種のクライシス状況が出現していた。再統一と冷戦後のグローバル化を経て、ドイツ人のアイデンティティのあり方は確実に変化しつつあった。何が「ドイツ的」で、何がそうでないのか、その境界が流動化し、違ったふう意識化されるようになったのである。

そのことについて、あるインタビューの中でメッツマッハー自身が語っている。彼は長い間ドイツ人であることに誇りを持たず、自虐的なアイデンティティしか抱けなかったという。しかし、最近ドイツ人はそうしたコンプレックスから抜け出しつ

辻
英
史

つあるのではないか。2006年にドイツで開催されたサッカー・ワールドカップでは、ドイツ人の多くが何の屈託もなく国旗を振り回して自国チームを応援した。ドイツ人は変わった。「自分自身の大きさについて何ら誇大妄想に陥ることなく、健全なやり方で自分を意識し始めた」のであり、だからこそ、今まさに「ドイツ精神」とは何なのかを問うことが重要になってきたというのである。

メッツマッハーは「ドイツ精神」をドイツ人が共有する集団アイデンティティと捉えている。彼の狙いは、それがどのようなものなのかについて音楽を通じて議論を喚起することであった。そのために、彼は〈ドイツ精神について〉のほか、ナチスによって禁止されたクルト・ヴァイルの音楽劇〈銀の湖〉(1933年)を含む様々な演奏会プログラムを用意したのである。しかし、議論は思いがけなくも政治的色彩を帯びたものになってしまった。

ドイツの新聞の多くが論争に加わり、演奏会の評と合わせて報じたが、大半の論調はメッツマッハーの試みに好意的なものであった。各メディアの反応は、〈ドイツ精神について〉の演奏が、すべてがわかりやすく面白かったわけではないにしろ、きわめて美しく印象的な箇所があったと指摘し、そして出演者たちの演奏レベルの高さを賞賛する声は、ほとんどの評に共通していた。ドイツ統一記念日という日付の選択には疑問を呈しつつも、これまでほとんど忘れられていたプフィツナーを取り上げたこと自体には評価を与える記事が大勢を占めた。その理由は、芸術作品の価値と、その创作者の経歴は無関係である、というものである。

結局、この論争では作曲家プフィツナーとナチズムや反ユダヤ主義との関係について立ち入った検証は行われなかった。そして、「ドイツ精神とは何か？」というメッツマッハーの問題提起も、まるで反応なく素通りされてしまったのである。

2002年に開催されたプフィツナー・シンポジウムで、演劇・音楽史研究者のモニカ・ヴォイタスは、プフィツナーの生涯と作品に対する取り組みは、「ドキュメントと同時に警鐘碑」となるべきであると論じた。この発言は今日〈ドイツ精神について〉の演奏を聴くうえでまことに意味深い。この曲は、過去の危機の時代においてひとりの芸術家の思想や創作がどのようなものであったかについてのドキュメントであり、同時に、論争の経緯を踏まえれば、現代においてひとつの国民のアイデンティティについて芸術や文化の側面から批判的に議論することがいかに難しいかについての警告としても聴くことができるのである。

Profile 辻 英史 つじ ひでたか

1971年京都府出身。東京大学大学院総合文化研究科修了、法政大学人間環境学部教授。専門はドイツ近現代史。ドイツの社会福祉制度・ボランティアのほか、日本やドイツの劇場文化についても研究している。